

ジェネラリストのための がん診療ポケットブック

勝俣範之、東 光久【編】

評者

上田剛士

洛和会丸太町病院救急・総合診療科

ジェネラリストにとって心強い味方ができた。『ジェネラリストのためのがん診療ポケットブック』である。2人に1人はがんに罹患し、3人に1人はがんで死亡している時代において、がん診療はジェネラリストにとって避けることのできない分野である。患者・社会からのニーズも高く、この分野に臨むことはやりがいがあることは言うまでもない。その一方で、がん診療は壮大な学問であり、ジェネラリストが挑むにはいささかハードルが高かった。本書ではがん診療のメインストリームであろう薬物療法についてあえて深く踏み入らないことで、このハードルを一気に下げた。その代わりにジェネラリストが知りたい内容が盛りだくさんとなっており、がん薬物療法を普段行っていないジェネラリストのために特化した一冊である。

例えばがんの予防については患者からの質問も多く、ジェネラリストにとって知らなければならぬ知識の一つであるが、「がんの

19.5%が喫煙による」「適度な運動はがん死亡リスクを5%下げる」などの具体的な記述は患者指導に大いに役立つであろう。また、がんのリスクとなる食品、リスクを下げる食品についても言及されている。がんを疑う徴候に関しても、例えば、Leser-Trélat 徴候は3~6カ月以内の急性発症で痒痒感を伴うことが脂漏性角化症との違いなど、臨床的に重要な知識が詰め込まれている。

コンサルテーション先が定まらず対応に困ることも多い「原発不明がん」や「高齢者のがん」「遺伝性がん・若年性がん」についても章が設けられており、この一冊だけでさまざまながんに対応できる。がん患者とのコミュニケーション、アドバンス・ケア・プランニング、緩和ケアについてもカバーしている。がんサバイバーケアの記述も充実しており、いつ、何によってフォローすべきかを教えてくれ、ジェネラリストを「オンコ・ジェネラリスト」へと昇格させてくれる一冊と言える。



がん薬物療法に関してはレジメンの詳細は紹介されていないものの、免疫チェックポイント阻害薬を含む薬物療法の副作用管理についてはしっかりと記述されている。薬物療法中のがん患者であっても、併存症や合併症のためにジェネラリストあるいは臓器別専門医が診療する機会は多いからである。がん薬物療法を普段行っていないジェネラリスト／臓器別専門医はこの書籍をポケットに忍ばせておくことで自信を持ってがん患者を診療できるようになるだろう。オンコロジックエマージェンシーについても記述されているので救急や一般外来の初療を担当する医師にもお勧めだ。

A6・288 頁
2022 年 4 月
定価：4,180 円
(本体 3,800 円+税 10%)
[ISBN978-4-260-04922-1]
医学書院刊